リトルリーグ誕生７０周年記念作品

# 僕たちのプレイボール

目指せウィリアムスポート！
僕たちの暑い夏が
今、始まる。

製作：飯原伴光　監督：三村順一

小原裕貴（新人）　吉田栄作　羽田美智子

原日出子　髙田延彦　沢木ルカ ／ オレステス・デストラーデ（友情出演） ／ 江波杏子

エグゼクティブプロデューサー：新庄剛志　竹村友里　プロデューサー：川﨑多津也　ヘイヨン・チョイ（米国）

協力プロデューサー：横田澄夫　相田英文　平川修治　五十嵐辰也　音楽プロデューサー：BanCou☆e!　アソシエイトプロデューサー：速水真吾　音楽プロデュース：ハーツワークス

脚本：太田龍馬　三村順一　撮影監督：瀬川龍　照明：岩崎豊　録音：西岡正巳　美術：山﨑輝　編集：金子数男　助監督：黒木浩介　制作担当：松野拓行

企画・制作：ＷＪ　製作：『僕たちのプレイボール』製作委員会　企画協力：レハサフ　オフィスオーパ　制作協力：オルタスジャパン　協力：江東区　配給：ゴー・シネマ

特別協賛：ミュージックスコーポレーション　協賛：明治製菓　ミズノ　三井広報委員会　三井ボランティアネットワーク

後援：リトルリーグ国際本部（米国）　財団法人 全日本リトル野球協会リトルリーグ委員会　財団法人 日本野球連盟

２０１０年初夏全国プレイボール！

http://www.bokupure.com/

# 忘れかけていた絆が感動の涙を呼び起こす！

## ストーリー

柊球児はアメリカに暮らし、親友のランディと共にリトルリーグでプレイしている。父の恒雄はプロ野球選手で、かつてメジャーリーグで投げたこともあるピッチャーだが、肩を壊してからはマイナーリーグを転々としていた。母の加奈子は日本に帰ることを提案しているが恒雄は受け入れず、ついに加奈子は球児と二人で帰国することを決める。球児はランディと翌年のリトルリーグ・ワールドシリーズでの再会を誓い日本に向かう。

日本に帰ってきた球児は、同級生の岡島沙希や村田雄平の薦めもあって「東陽リトル」というチームに入る。しかし、球児にとって東陽リトルはどこか物足りなく、アメリカとのやり方の違いもあり監督やチームメイトとうまくやることができない。ついチームメイトを叱責したり、コーチを差し置いて指導したりする。そのうちエースの前田正道やライトの野々村海と喧嘩になってしまう。

そんなある時、球児は沙希の母から沙希がリトルを始めた理由を聞く。そこには悲しい過去があった。また、雄平は球児にキャプテンとして悩んでいることを正直に打ち明ける。その日の夜中、球児はこっそりとアメリカの恒雄に電話をかけてみる。しかし、本当に言いたいことは言葉にならず、結局うまく話せない。

ある休日、沙希は無理やり球児をお祭りに連れ出した。祭り会場で沙希が「来た！」と指さす神輿を担いでいるのは、正道と海たち。球児は無理やり神輿を担がされる。驚いていた正道たちだが、いきおい球児に担ぎ方を教え、体をぶつけ始める。祭りの後、球児、正道たちは自分たちの思いを語り始め、少しずつ心を通わせていく。

次の試合でエラーをしてしまった球児。ベンチで落ち込み、言葉もない。だが、それを帳消しにするように正道が特大のホームランを放つ。球児は思わず立ち上がり、ガッツポーズをしている。他の選手たちがそれを見ている。この試合をきっかけに段々とまとまっていく東陽リトル。ワールドシリーズを目指し、練習に励んでいく。

その頃、アメリカの恒雄は新しいチームのある土地へ降り立つ。そこは奇しくもウィリアムスポートだった。それを聞いた加奈子は、ある決意を胸にアメリカへ旅立つ。

そして、春。アメリカで、日本で、それぞれのシーズンが始まる。

## イントロダクション

エグゼクティブプロデューサー：新庄剛志

プロ野球を引退してから、自分の気持ちが再び野球に向くまでは野球の仕事は受けないと心に決めていた僕は、子供たちと野球をすれば、野球をはじめた頃の自分の気持ちを思い出せるかな？と思い、初めて野球の仕事を引き受けました。引退から３年が経った２００９年の春のことでした。

映画の仕事もプロデューサー業も始めてだった僕をあたたかく迎えてくれたのは、12人の（小さな）チームメイトとスタッフの皆さんでした。東陽リトルの彼らが楽しそうに野球をする光景は、野球から遠ざかっていた僕の心に「プレイボール！」をかけてくれました。そして気づけば、朝から夕暮れまで、子供の頃のようにグラウンドで時間を過ごしていました。それは17年間、野球を職業としていた僕にとって、忘れかけていた大切な感覚でした。

撮影中は、多くのスタッフや裏方さんが情熱的に映画作りに携わっている場面を何度も目にしました。今まで映画とは観るだけのものでしたが、作る側に立つと、これほど多くの方々によってひとつの作品が仕上がっていくことを学びました。この作品が完成を迎えたのは、多くの方々のご協力があってこそ。皆さん、本当におつかれさまでした。

撮影の合間に交わした、三村監督との会話は印象的でした。「お金や時間があったら、何をしますか？」と聞いたとき、監督はきっぱり「お金や時間があったら、大好きな映画を撮る」と言いました。三村監督は、とてもいい表情をしていました。

素敵な仲間と過ごしたひと夏の時間は、僕に野球の大切さを思い出させてくれました。この映画をご覧の方々に、野球の輪が、そして仲間との友情が広がっていくことを祈っています。僕の心に「プレイボール！」をかけてくれた球児たち12人の子供やスタッフとの出会いに感謝です。

## 映画製作に寄せて

（財）全日本リトル野球協会　リトルリーグ委員会：木村堅二

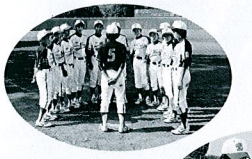
昨年の春先にリトルリーグに関連する映画制作の話が持ち込まれ、1年半が過ぎました。この間、世界的な金融恐慌、経済不況等があり、映画制作にも大きな影響を与える結果となりました。しかし、今般、関係者皆様のお力でこれらの悪環境を乗り越え、当初の計画に沿った映画が出来上がりました。リトルリーグに関与する一人としてこんなに嬉しいことはありません。

リトルリーグに関する映画は外国において何本かありますが、日本のリトルリーグをベースに、それも米国及び日本国内でのロケを行う規模の映画は初めてです。米国のリトルリーグ国際本部は勿論のこと、日本リトルリーグの12連盟の関係者皆様のご賛同とご理解を取り付けて制作されました。野球を通じて青少年の健全な発育を目指すを掲げている我々リトルリーグの団体として、今回のストーリーに織り込まれている友情、信頼、家族の絆、地域社会との結びつき等は、ややもすると忘れられることの多い厳しい現代社会の中で、再度、我々自身が忘れかけたものを見つけ出す具体的な材料の一つになるのではないかと大いに期待しています。

また、リトルリーグはご父兄は勿論のこと数多くのボランティアの方々のご支援とご協力を得て運営管理されています。全国の或いは全世界のリトルリーガー達がこのボランティアの皆様に支えられている事実を再認識するとともにボランティアの皆様への感謝の気持ちを、毎日の練習に、そして各種大会に臨む際に常に持っていて欲しいと思っています。

今回、微力ながら制作のお邪魔をしながらのお手伝いに加えて頂いた一人として、この作品を多くの皆様に観て頂くとともに皆様に大きな感動を与えることが出来れば、人生の楽しい思い出の１ページになるものと思っています。

最後に、今回の制作に携わって頂いた多くの皆様に心より感謝申し上げます。



特別前売り鑑賞券等のお問い合わせはこちら

『僕たちのプレイボール』製作委員会

Tel:03-6418-5098 Fax:03-5464-9357

東京都港区南青山 6-12-3
南青山ユニハイツ 604

http://www.bokupure.com/

２０１０年初夏　全国ロードショー！！

©2010『僕たちのプレイボール』製作委員会